

清流

題字：芳野 充

令和3年4月30日
第52号

発行所 加来不動産(株)
発行者 加来 寛

北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに
静かに
清流のように

良い言葉をえらび語気をやわらげる

「言葉を大切につかう」というフレーズは、皆さまもよく耳にすることだと思います。そのとおりだ、とうなずく人もおおくいるでしょう。ただ、そうは言ってもなかなかそれを実感する機会はおおくないかもしれせん。さいきん、この「言葉」というものはじつに奥深いものだ、と認識したできごとがありました。

わたしは娘の小学校のPTA会長の昨年まで仰せつかっておりました。PTAとはご存知のとおり、子どもの保護者が先生方や地域と協力して、子どもの安全や笑顔をふやそうとボランティアで活動するものです。とは言え、抽選で仕方なく参加しているという人もおおいもので、それゆえ意見が合み合わず険悪な雰囲気になることもしばしばです。そのような場面で気づいたことがあります。それは「言葉」によって雰囲気が良くも悪くもなる、ということなのです。

ある学校行事の開催内容について、保護者同士の意見がくいちがい、お互いが語気をつよめ自分の主張を押しつけてきました。みるみるその場の雰囲気がおもく冷たいものにかわるのを肌で感じました。「まずいな」と思った瞬間、べつの保護者がとてもやわらかな雰囲気です。またお互いの意見を尊重しそれぞれの労をねぎらう言葉をかけました。するとまるで暗雲たちこめた空から一筋のあたたかな光が地上に降りたち、そこからガラリと明るくやさしい雰囲気に一変したのです。そのとき、「言葉を大切につかう」とはこういうことだ、と気づかされました。その後、二人の話をよく聴くと、お互いにまちがったことは言っていないませんでした。しかし言えることは、内容が正しくても発する「言葉」をえらばず、また語気がつよいと、相手の感情を逆なでし怒らせ、不快さを与えるということ。逆に、相手を労う「言葉」をえらび、語気やわらかければ、相手やまわりに安心と喜びを与えられるということ。

品性を豊かにするための「二十の徳目」の九番目は、「愛語」です。「愛語」とは、やさしい言葉づかいのことです。何気なくつかっている言葉に、相手への思いやりを込めたものが「愛語」だと気づきました。

社内や我が家でわたしが発する「言葉」に、相手への思いやりがどれだけ込められているだろうか。そう振り返ると、おおくの場面で「言葉」にトゲがあったり、語気がつよいと感じます。そのような場面をすこしでも減らすべく、良い言葉をえらび語気をやわらげて、相手に安心と喜びを与えられる人に近づきたいと思えます。

加来

寛

